

共同研究「道徳性の発達について」

関口 昌秀

これは「道徳性の発達」に関する文献的な研究である。

道徳性の発達というものは一般に、認知能力の発達に比べて研究しづらい性質をもっている。道徳は大きく文化の影響を受ける。しかも、道徳性と言った場合でも、その中味が何を指すか、論者によって大きく異なる。戦前、波多野完治がピアジェの道徳発達研究である『子どもの道徳判断』の全面的な紹介を断念したのは、ピアジェの合理性の道徳が当時の日本社会批判になるという理由からであったのは、道徳研究が文化の影響を受けることの象徴である。道徳性というものが、このように客観的な性質をもったものとして特定しにくいこと、これが道徳研究の難しさの一つである。このことにも関連するが、同じ時代同じ文化に所属していても、道徳という言葉で何を思い浮かべるかは、研究者によって必ずしも一致するものではない。論理的に言えば、道徳性というものは、その内包も確定しなければ、その外延も明確でないところがある、ということである。

したがって、これまで道徳性の発達に関して実験的方法でなされた研究はあまりない。ピアジェをその例外の代表者と呼ぶべきかもしれない。しかし彼の場合でも、認知能力の発達研究を主とした彼の発達研究全体から見れば、道徳性発達の研究はその初期に限られたある意味傍流的研究と言ってもあながち過言ではない。

共同研究とは言うものの、対象を共通にした実験研究ではないため、ここに載せる2本の論

文は、それぞれ相対的に独立した個人論文という形を取っている。

須川論文「フロイトにおける道徳性発達の論理——エディプス・コンプレックス概念の検討を中心に」は、今日の道徳理論に大きな影響を与えている精神分析学の創始者フロイトにおける「道徳性の起源」を説明するエディプス・コンプレックス概念を、今日的な立場から原理論的に再検討しようとするものである。

拙稿「ピアジェ理論における道徳性発達の論理——道徳性の発達と社会形成のためのノート」は、ピアジェが『子どもの道徳判断』にまとめた道徳性発達の論理を原文に即してできるだけ丁寧に理解しようとしたものである。

フロイトの精神分析学とピアジェの発達理論は現代の道徳発達理論の2大潮流と言えるほどの立場にいる。ピアジェの道徳理論に関してはともかく、精神分析学に関しては、精神医学だけでなく、文化人類学や社会学などきわめて多方面から、フロイトに対する厳しい批判を含め、これまで数多くの文献批判的研究がなされてきた。しかし、そのことによって教育学的な批判検討の意味がなくなるというものではない。むしろ、つねにその時の時代性によって読み抜かれていかなければならない。ここに文献研究の意味があるだろう。

共同研究者の須川公央氏は、2001年3月に本学理学部化学科を卒業し、現在、東京大学大学院教育学研究科博士課程に在籍している若手の教育研究者である。